教職概論　　学生の解答　例（コメント）

第４回　教員の歴史及び社会的な側面

A

私は聖職者としての教師になりたい。

①人間的品格が高く、他人の模範たる行動や態度をとること、②教育に対する強い使命感を持って子どものために尽くすこと、は私の目指す教師像です。「教師」を一般の職業と異なる性質を有するものと認識するのは、それが単に知識・技術を伝授するにとどまらず、未発達の子供に対してその人間精神の形成に働きかける職業だからである。という言葉が心に残った。知識・技術を伝授するにとどまらず　という部分は私が1番こだわりたい部分です。勉強だけではなく教えることのできることは沢山あると思います。他の人には教えることのできない自分の強みを持った教師になりたいです。

B

1　私が継ぎたいと思った教員は「師匠的」教員です。この教師は先生と生徒との人間関係を重んじるタイプの教員です。なぜこのタイプを選んだかというと、先生と生徒がとても仲が良いことは良いことだと思います。しかしその関係が行き過ぎてしまうと友達感覚になってしまい先生と生徒という関係が崩れてしまいます。仲が良くても先生と生徒という一線はしっかり引いて接するべきだと考えます。考えが被るところがあったので選びました。

2　教師が子供に模範的な姿を見せることが大切だと思います。資料4－１－２の①と②の意見に賛成です。①の他人の模範たる行動や態度をとることでは教師が例えば教室のゴミを拾うだとか。当たり前のことを当たり前にやって見せることは大切なことだと思います。②の子供のために尽くすことは教師が一番大切だと考えています。逆にこれができなかったら教師はできないと思います。

３　私は「教育技術は多少劣っても思いやりのある教師」を目指します。教育技術は自分が努力して学び続ければ少しずつでも力はついてくるものだと考えます。高い技術力を持っていても思いやりがなかったらせっかく技術があるのに生徒は聞く耳を持ってくれないかもしれません。少し不器用でも思いやりを持って頑張って伝えようとすれば自然と伝わっていくと考えます。

C

　私は最初「思いやり」を持つ教師の方がいい、目指したいと思ったが、授業資料4－3を読んで思いが変わってきた。

　教師は子どもを預かる立場で、責任を持って学びを教える。だから、当然「高い教育技術」を持つ教師がいいに決まっている。子どもの保護者も「高い教育技術」を持った教師を望んでいるはず。授業資料4－3を読んでさらに「確かにそうだな。」と思った。

　子どもに質問された時に「わからない」という言葉は禁句だと思う。「わからないから、頑張って考えるね。」なんて通じるはずがない。だが、現代社会にはそういう似たような考えをした教師がいる。そうした心構えがあれば教師として立派であるとは言い難いだろう。どんな職業の人でもその仕事の技術・方法を持ち、仕事に励んでいる。「医師だから」「大工だから」なんて関係ない。職についたらもうその職の専門の人。教師として持っている全ての技術を発揮し、知識を子どもに教える。そういう義務があると思う。

　子どもと明るく接しながらコミュニケーションをとり、信頼を得て、子どもを教え育てる。それが教え育てる方法の1つに入ると思うけど、はたしてそれだけで子どもに、本当に教えたいことが伝わるのか。「高い教育技術」を持ってないで、簡単に子どもに接する、教え育ててはいけないと思う。私は教師を目指す身として、「高い教育技術」を持った教師を目指したい。

第５回　教師との仕事と多忙感

A

教員の一日を見て仕事の多さに驚いた。教員の仕事は授業だけではない。朝の登校指導、会議、休憩時間、給食指導、清掃指導、部活指導、下校指導、提出物の確認、採点、次の日の授業準備、成績処理など。一日を通して気を抜ける時間もなく、日本の教師は一人一人が受け持つ仕事が多すぎると感じた。この仕事量が多忙につながっていると考える。

「教師のバトン」がとても気になり、自分でも検索してみた。そこには実際に今抱えている悩みや現状が書き込まれていてとても心に刺さった。倒れるまで仕事をし、救急車で運ばれても次の日出勤。朝六時出勤、家に着くのは２４時、残業代０。死ななきゃわからない。など考えられない書き込みが沢山あった。実際自殺などの問題が起きていますが、何も変わってないのが現実です。

そしてこのような実際の仕事量や多忙さ、給料など調べて初めて知った。私のように現状を知らない人は沢山いると思う。現状を知ってもらうことで、もう少し教師への感謝の気持ちが芽生え、教師たちもやりがいを感じ、少しは気持ちに余裕ができると思う。また、現状を知った外の人たちが声をあげてくれたりすれば少しでも改善策が実行されるかもしれない。

B

私が考えるには、外国の教師は授業だけをしている感じですが、日本の教師は授業はもちろん、休み時間やご飯、掃除、その他全ての事を見てあげている状態だと思いますが思います。そのため日本の教師は労働時間が長く、多忙なのだと思います。また授業が電子化していて、生徒に説明するために書類を作ったり、資料を作ったりすることも近代の多忙な理由だと思います。また、日本人は喜ばれる事を好む人が多いと思います。教師は自分が頑張れば頑張る分だけ、子どもが成長したり、子どもが喜ぶ姿を見ることができます。そのため教師は『もっと頑張ろう。』『こんなに喜んでくれるんだ。』という気持ちになり、さらに頑張る人が多いのだと思います。良いことかもしれませんが、時には頑張りすぎてしまい悪い結果に繋がってしまう可能性もあるかもしれないと考えます。

私はこの多忙な仕事を少しでも緩和するべきだと思うのですが、緩和するには仕事を分担するしかないと考えます。ですが分担し仕事が分散、楽になる一方で生徒の情報も分散してしまうというマイナスな面もあると思います。この課題を解決するのはとても難しいと感じます。海外のように、授業を行う教師の他に専門の人を作ることが1番の対策ではないかと思います。

C

１　教師の1日は基本児童に合わせなければならない。授業だけでなく授業以外の時間も児童のことを気にかけて1番に考えなければならない。行事の場合も同様に言える。また最近はタブレット教科書などの導入により、新しい授業形態が追加されそれにも対応しなければならない。放課後以降は自分の時間だが、その時間も児童の為に費やす。そんな日々が繰り返される。これが現代の教師の多忙を表している。

２　「仕事時間」「事務業務」「授業準備」に費やした時間は最も長く、知識や専門性を高める為の「職能開発」に費やした時間は最も短い。(比較：他国)「教師」は“学業を教える人”と辞書で記してある。児童に責任を持って教えなければならないのに、はたして「職能開発」に時間を費やさなくていいのか。ただでさえ教える内容や教え方の変革を迫られているのに、教師の多忙の時間を増やすようなことばかりしている気がする。どの国でも教師は共通とは言えない。

４　「奉仕性」「自己実現系ワークホリック」という言葉は教師の多忙の要因になってしまっている。確かに子どもの為に自分の時間を消費することは大切なことだが要因をつくったら元も子もない。私は「奉仕性」「自己実現系ワークホリッツ」をそんなによく思わない。

５　教師は燃え尽き症候群に加え、日々の仕事の多忙さとそれによる他とのコミュニケーションを取る余裕がなくなり孤立化してきている現状だ。個人が行うものとして何でも抱え込まず、時には趣味で発散し、時には誰かに相談して自分なりの対策方法を見つけ、それをしっかり実行しなければならない。

３　今回の授業で教師には他国と比べ物にならない多忙さがあることがわかり、将来なりたいものがこんなにも多忙に悩まされているとは知らなかった。この多忙を乗り越えるには自分で自分の時間を見つめ直すことが大切だと思う。あと「＃教師のバトン」というものが実際あって、何が問題かわかっているはずだから、文科省はこれからも教師の多忙さを減らすような対策をして欲しい。急に多忙さを減らすのは難しいし、子どもを預かっているわけだから教師は適当にしてはいけない。だから、多忙の時間を費やしてしまうのは仕方がない。だが、一人一人がもう少し自分の時間を大切にするようにすれば少しでも改善されると考える。